

外国人が頼れる地域に

富玖チュアンさん(合志市・ベトナム出身)

「人を助けるのは人。非常時は誰かに助けてもらえるよう、地域とのつながりを強くしておきたい」。合志市で暮らす会社員の富玖チュアンさん(38)＝ベトナム出身＝は、熊本地震で日常が奪われた不安な経験を踏まえ、「外国人が周囲を頼れる環境づくり」の重要性を訴える。

【1面参照】

消防団加入 架け橋役を

富玖さんは2006年、留学のために来日した。名城大の建築学科で建物の設計の基本を学び、大学院修了後、熊本市の設計事務所に就職。耐震性のある建物の構造計算などを担当している。21年に日本国籍を取得し、合志市の消防団員として地域活動に精を出す。16年の熊本地震の本震では、当時暮らしていた熊本市北区の市営住宅を大きな

熊本
地震
10年

揺れが襲った。屋外の駐車場に避難した富玖さんと妻は、その後も余震が怖くて部屋には戻れず、駐車場にとどまっていた。すると、地域住民が敷物代わりにと段ボールや、コーヒートを分けてくれた。

普段から地域の清掃活動に参加し、「顔の見える関係」を築いていた富玖さんは「経験したことのない揺れで混乱する中、地域の人たちのおかげで落ち着いた」と振り返る。

「地震時の人の優しさに身に染み、人を助けたい」という気持ちで湧いた」と、22年に合志市に引越した。

24年に市消防団第12分団に加入。火災予防の呼びかけや消火設備の点検に積極的に関与し、火災現場にも数回出動し、ホースの収納や周囲の安全確認などを受け持つ。「ほかの団員と連携しながら地域の安全を守りたい」とにっこり。

富玖さんは5月の換法大会で指揮者役に任命された。第12分団の野口信也さん(44)は「ゆくゆくは消防団の中心的存在になってほしい。特に災害時、外国人支援の架け橋役も担ってほしい」と期待を寄せる。

在熊本ベトナム人協会の副会長でもある富玖さんは「災害時、外国人まで支援が行き届かないケースもある」と指摘する。熊本地震では、周りの目を気にして避難所に行かない外国人や、避難しても言葉の壁や居づらさを感じて離れる外国人もいたという。

富玖さんは「外国人にとっても大切。周囲とつながりがなく、生活に不安がある外国人の手助けに力を入れたい」と強調する。

(上村彩綾)